中　学　校

平成２３年度

教育研究員研究報告書

美　　術

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ　研究の仮説・期待する生徒の姿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅳ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅴ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅵ　提案授業

◎早見表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

◎提案授業

①「美術史」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

【文化的な側面・歴史的遺産から・10～15分】

②「身近な美術を探そう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

【文化的な側面・伝統工芸から・１～２時間】

③「美術を大きく捉えることができるか」・・・・・・・・・・・・・・・・・12

【実生活に関わる側面・１時間】

④「広げる！深める！美術の視点！！」・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

【実生活に関わる側面・機能美から・１～２時間】

⑤「用の美と伝統工芸　堆朱（ついしゅ）の箸」・・・・・・・・・・・・・・・・16

【文化的な側面・実生活に関する側面・作品制作・５時間】

○「美術のワクを広げよう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

（③の指導案・具体的な実践例・１時間）

Ⅶ　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

Ⅷ　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

研究主題

美術文化についての理解を深める授業

Ⅰ　研究主題設定の理由

多くの人にとって中学校の美術の授業は、学校教育における最後の美術の学習となりかねない。しかし、私たちが生きる上で「美術文化」との関わりは密接で重要である。なぜなら美術文化は、我々に日本の歴史を鮮やかな色彩と形をもって示してくれ、日本の文化を知ると同時に、世界とのつながりや違いまでも教えてくれるからだ。また、生活の中にある様々な物に対して美術的な視点を与えてくれ、道具などが時代や社会の要求によって変化していることを知り、過去の営みがつながって現在の生活をより豊かにしていることに気付かせてくれる。

しかしながら、生徒たちの現状として、文化を学ぶ機会の減少・関心の低下が危惧され、東京都教育委員会も「日本の伝統・文化理解教育の推進」（平成20年）に取り組んでいるところである。この中には伝統・文化理解を通した国際理解、という視点も含まれている。

また、「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果」（国立教育政策研究所　平成23年3月）によると、中学生の半数以上が美術の学習は普段の生活や将来の役に立たない、と考えており、小学生の頃よりもその傾向がより高まるという結果が示されている。

ほかにも、美術文化に関連して、現在の生徒を取り巻く実態には以下のようなものがある（前述の「日本の伝統・文化理解の教育の推進」、「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果」及び本研究アンケート結果による。）。

- 自国の美術文化を学ぶ機会の減少
- 住環境の変化に伴い、日本の伝統・意匠（欄間・床の間など）に日常的に触れる機会の減少
- 食文化（料理に合わせて器を選ぶ、器が定位置に並ぶ生活から、ワンプレートに盛り付ける欧米化の食事など）の変化
- 美術館、博物館は多くあるが、実際に実物を見るという経験や日常的に足を運ぶという機会が乏しい傾向
- 限られた授業時数の中にあって、作品制作が多く、鑑賞の時間が少ない実態
- 名画名品に触れる題材は多くあるが、身の回りの美術的な要素に目を向けさせるような授業が少ないという実態
- 実体験が少ないので着想する土台が狭く制作においても発想が広がりにくいという傾向

また、新学習指導要領の「２　美術科改訂の趣旨」（ｉ）改善の基本方針にも、「美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する。」とある。

また、これらの生徒を取り巻く環境の変化や生徒の実態から見える問題点の改善を目指して、改訂された新学習指導要領の美術科の目標「美術文化についての理解を深め」という文言が、新たに加えられたものと考える。

したがって、美術文化について理解を深めていく授業の研究は、現在の課題改善と平成24年度に全面実施となる中学校学習指導要領の実施に向けて、喫緊かつ重要なテーマであると考えた。

そこで本研究では、『美術文化』の内容を、「文化的な側面」と「実生活に関わる側面」に整理をして、分かりやすい授業を構築・実践することで、生徒が美術文化についての理解を深めていくことを目指した。そして、この「美術文化についての理解を深める」ことで、生徒が美術を愛好する心情と感性を育て、生きる力を育むことをねらいとして主題設定した。

Ⅱ　研究の視点

生徒にとって、美術文化についての理解を深められる様々な要因を探り、より理解が深まるような授業を多面的に考察・検証し提案していく。

多くの指導者が、所属する学校の実態や年間指導計画に応じて、活用・応用できるような授業の提案を目指した。そのために、『美術文化』について学ぶ授業を「文化的な側面」と「実生活に関わる側面」に整理した。「文化的な側面」からの授業は、我が国及び諸外国の文化、伝統、遺産などを題材とするもの、「実生活に関わる側面」からの授業は、生活の中の美術の働きや日用品と美術との関わりを題材とするものと捉え、提案の柱とした。また、授業時数についても、1時間で完結する授業、数時間かけて行う形、授業の最初の10分間で行うものを示し、具体的で実効性の高い授業の提案を行った。

Ⅲ　研究の仮説・期待する生徒の姿

1　仮説

『美術文化についての理解を深める授業を実践することで、生徒が美術を愛好する心情を深め、豊かな感性を養い、生きる力を育むことができる。』

2　期待する生徒の姿

『美術文化について理解を深める授業』を、「文化的な側面」と「実生活に関わる側面」を意識して実践していくことで、次のような生徒の変容が期待できると考えた。

「文化的な側面」からの授業を通して

・日本文化の継承と創造の重要性を理解する。

・自国の文化を基にした国際理解を推進する。

「実生活に関わる側面」からの授業を通して

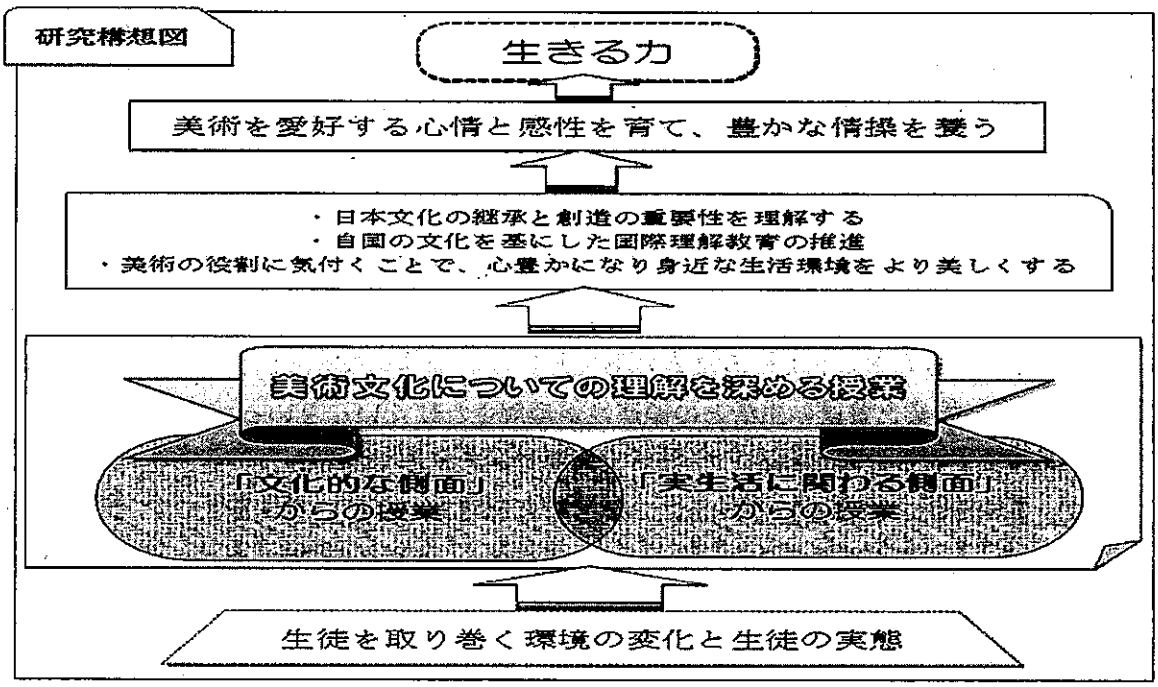
・美術の役割に気付くことで、心豊かになり身近な生活環境をより美しくする。

これらの変化は、自国文化に対しての誇りを生み出し、正しい国際理解を推進することにつながる。また、身近な生活環境において美術的関心を深めることで、生活や人生をより豊かにしていくことができ、今後の制作活動においても多様な表現につながると期待される。

さらに、主題設定の理由で示したような様々な課題についても、改善していける基盤ができていくと考える。生徒たちが、生涯にわたって関わり続けていく「美術文化」についての理解をいろいろな角度から深め、自分の知識や技能、感性の育成につなげていくこと

ができれば、自分の人生や人との関係がより豊かなものになるはずである。

このことは、まさしく「美術を愛好する心情と感性を育て、豊かな情操を養う」ことであり、「生きる力」を育むことと一致する。



Ⅳ　研究の方法

1　現在の美術の授業に対する実態について、課題・問題点を出した。

2　生徒の実態が、学習指導要領改訂により美術の目標に加わった「美術文化についての理解を深め」という文言と重なることに注目し、そこから研究テーマを探った。

3　この文言が追加された背景や根拠を様々な文献や調査結果などを基に調べ、生徒を取り巻く環境についての裏付けをとり、指導者側の課題についても確認した。

4　課題・問題点の改善と生徒の望ましい変容のために、また、新学習指導要領の適正な実施のために「美術文化についての理解を深める授業」をテーマとして研究していくことに決定した。

5　「美術文化」とは何かについて考え、「文化的な側面」と「実生活に関わる側面」とに分けて捉え、それぞれを意識した授業を工夫して立案することとした。

6　立案した授業を、多くの指導者が活用可能な形で提案するために検証した。

7　授業を作る根拠の一つとして、生徒は周囲に美術的なものがたくさんあるにもかかわらず、それらを美術と関わりがあるとは認識していないのではないか、という予測を立て、実証するために独自にアンケート調査を実施した。また、保護者についても生徒を取り巻く最大の環境と考え同じく調査を行った。

8　アンケート調査を分析・考察し授業研究に生かした。

9　授業の立案、実践、考察、検証を繰り返しながら、分かりやすく活用しやすい形で五つの提案授業を示した。

10　研究全体を振り返り、成果と課題を検証した。

Ⅴ　研究の内容

1　課題の把握からテーマ設定まで

現在の美術の授業を取り巻く様々な要因の中から、課題・問題となる状況を挙げた。その中で、自国の文化・伝統に関する学習や理解が十分ではないという点や、普段の生活の中に存在する美術的なものへの認識がもっと高まってもよいのではないか、という意見が出された。そこで、東京都教育委員会による「日本の伝統・文化理解教育の推進」や国立教育政策研究所による「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果」を基に客観的な根拠を探り裏付けを取っていった。あわせて、新学習指導要領の内容についても、文部科学省による「中学校学習指導要領解説　美術編」や「学習指導要領改訂の基本的な考え方に関するＱ＆Ａ」を参考にしながら検討し、この課題との関連を検討した。

そこで確認できたのが、美術の授業の現状として、「日本の文化・伝統についての学習が少ない」「美術の授業と普段の生活との関連性が理解されにくい」といった生徒の実態と、「鑑賞の授業時間がなかなか取れない」という指導者側の状況であった。

また、その現状の改善を図るために、新学習指導要領の目標に「美術文化についての理解を深め」という言葉が加わったことから、本研究のテーマを「美術文化についての理解を深める授業」とすることにした。

このテーマに基づいて研究を進めることで、生徒が日本文化の継承と創造の重要性を理解し、身近にある美術の役割に気付き、変容を促していくことが生きる力につながる、という仮説を立てた。また、実践しやすい授業を構築し提案することで指導者側の課題の改善も目指した。さらに、新学習指導要領の確実な実施においても重要な役割を果たせると考えた。

2　テーマの検証

授業を具体的に立案するに当たり、「美術文化」についての捉え方を検討した。美術文化について多面的な見方がある中で、大きく二つの側面に整理した。自国、諸外国の文化・伝統などを主な題材とした「文化的な側面」からの授業と、普段の生活や身の回りにあるものと美術との関連を中心に扱う「実生活に関わる側面」からの授業である。この二つの側面を意識して授業を計画・考察・検証していくことで研究を深めていくこととした。

3　生徒・保護者アンケートの考察

授業の題材を考えるにあたり、生徒は身の回りに美術と関わりがあるものがたくさんあるものの、それに気付いていないのではないか、という予測を立てた。それを裏付けるために研究員が所属する各学校の全校生徒を対象に、美術に対する意識を調べるためのアンケートを実施した。アンケートの項目は、指導者から見て、生徒が「美術に関わりが深いと考えそうなもの」「少し関わりがあると考えそうなもの」「あまり関わりがないと考えそうなもの」をそれぞれ10項目ずつ計30項目設定した（６ページ　資料１）。その項目をランダムに並べたアンケート用紙を、指導者が順番に読み上げるペースに合わせて、直感で「美術に関係する」と思うものにチェックさせた。その結果を全体と学年ごとに集計した（６ページ　資料２）。

その結果、日頃の美術の授業で扱う題材や道具（絵、絵の具、彫刻）や、世界的な知名度があり、美術のイメージに直結しやすいと思われるもの（モナ・リザ、美術館）が上位であった。下位５項目は「ペットボトル」「自転車」「駅」「トイレ」「給食の白衣」でいずれも「少

し関わりがあると考えそうなもの」又は「あまり関わりがないと考えそうなもの」と想定したものであった。また、「葛飾北斎」は学年が上がるごとに顕著に上昇していった。これは、授業で触れるか触れないかで大きく変わると思われるが、全体では40.1%であり、わが国の代表的な作家としてはやや低い印象を受ける。「金閣寺」にも同様の傾向が見られた。下位になった項目はいずれも身近なものであり、用の美を備えているにもかかわらず、実際には美術が関係していると認識していないのではないか、というこちらの予想が裏付けられた結果となった。このことは、「実生活に関わる側面」と「文化的な側面(特に日本美術)」の二つの側面から授業を行うことが、「美術文化についての理解を深める」ことになる、という本研究の大きな根拠の一つとなった。

また、保護者にも生徒と同様のアンケートをとった。生徒を取り巻く大きな環境の一つとして、保護者の美術に対する意識も考察し、今後の授業提案に生かしていくことをねらいとしている。その結果、ほとんどの項目で生徒と同様の数値を示しており、保護者の意識が生徒の環境として非常に重要であることが裏付けられた。「美術だと思う」の1項目当たり6のパーセンテージは、生徒44%、保護者40%であった。加えて、美術館へ行く頻度を尋ねた質問と、美術番組を見る頻度を尋ねた質問においては、実際に足を運ぶという能動的な行為にまではいたらなくても、根底にある美術への興味関心は高いのではないかと思われる結果となった。

4　授業研究と提案

これらの根拠を基に、五つの授業を実践した。その内容は、検証を踏まえて「提案授業」という形に精査し、8ページから16ページに分かりやすく示した。見開きで授業案と解説に分けて見やすく提示し、指導者が活用・応用しやすい形にした。さらに、提案授業③については、具体的な実践例として18ページから20ページに指導案として提示した。

また、それぞれの授業について、時間と扱う内容が見やすいように一覧にしたものを早見表として7ページに表示した。

5　生徒の変容と研究のまとめ

これらの授業を検証し生徒の変容を捉えた。一つ一つの授業において、ワークシートや感想等の分析を基に、読み取った変容を21ページから23ページに詳しく載せた。それらを総括すると、生徒は、「文化的な側面」からの授業では、美術史の学習を通して自国や諸外国の美術の流れを理解し、伝統的な工芸品を鑑賞したり制作したりすることを通して、文化の創造や継承の重要性を学ぶことができたと言える。また「実生活に関わる側面」からの授業では、これまで美術との関わりを意識しなかったものに美術的な視点を見出し、身近な生活用品に備わっている用の美に気付くといった、新たな価値を作り出すことができた。

この生徒の変容は、本研究の仮説で述べた、期待する生徒の姿に近いものだと言える。したがって、仮説とした「美術文化についての理解を深める授業を実践することで、生徒が美術を愛好する心情を深め、豊かな感性を養い、生きる力を育むことができる」をおおむね実証することができたと捉えている。加えて、多くの指導者が活用しやすい形での授業提案は、新学習指導要領施行に際しての具体的な授業立案にも寄与するものであると考える。

（資料１）

『生徒・保護者アンケート　項目』（計 30 項目）

○「美術に関わりが深いと考えそうなもの」として設定（10 項目）

モナ・リザ、着物、美術館、金閣寺、奈良の大仏、彫刻、絵の具、アクセサリー、葛飾北斎（かつしかほくさい）、絵

○「少し関わりがあると考えそうなもの」として設定（10 項目）

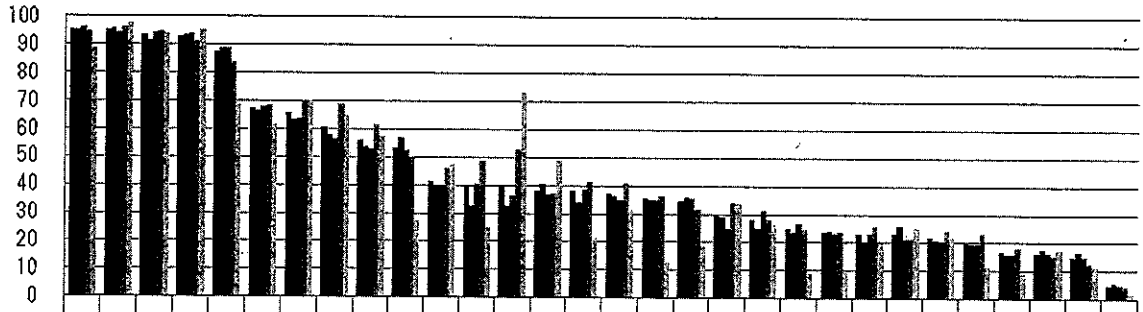
自転車、箸、家、マグカップ、車、給食の白衣、写真、ケーキ、シャープペンシル、照明

○「あまり関わりがないと考えそうなもの」として設定（10 項目）

ペットボトル、トイレ、お札、A４の紙、公園、道路、富士山、一流スポーツ選手の動き、標識、駅

（資料２）

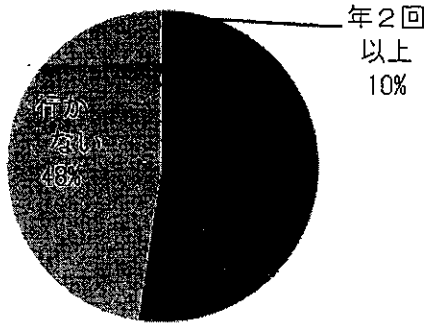
「美術」との関連があるかを調査した結果



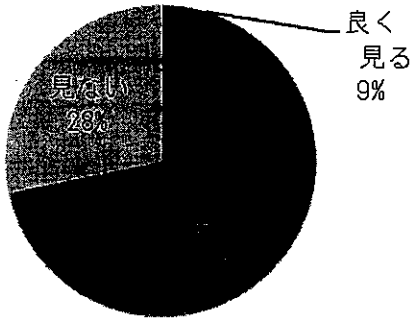
	絵	モナリザ	彫刻	美術館	絵の具	写真	金閣寺	奈良の大仏	着物	富士山	アクセサリー	標識	葛飾北斎	照明	マグカップ	家	A4の紙	お札	公園	ケーキ	シャープペンシル	道路	車	一流スポーツ選手の動き	はし	ペットボトル	自転車	駅	トイレ	給食の白衣
■総数（%）	96	95	94	93	88	68	66	61	56	53	42	40	40	38	38	37	35	35	29	28	25	24	23	23	22	21	17	16	15	5
■１年生（%）	95	96	92	94	89	67	63	58	54	57	39	33	33	41	34	36	35	36	29	25	23	24	20	26	21	20	16	17	17	6
■２年生（%）	96	94	94	94	89	68	64	57	53	53	40	40	37	37	39	35	35	36	25	31	27	23	23	21	20	19	16	16	15	5
■３年生（%）	95	96	95	91	84	68	70	69	61	50	46	49	53	37	42	41	36	32	34	28	25	24	26	21	24	23	18	15	13	5
■保護者（%）	89	98	94	95	68	61	70	65	58	27	47	25	74	49	21	32	13	19	34	27	9	10	20	25	22	11	9	17	11	2

保護者のみの質問項目　アンケート結果（２項目）

①美術館に行きますか？



②テレビの美術番組を見ますか？



●実施：平成 23 年７、９、10 月　●対象：研究員所属中学校　≪生徒 1210 名≫　≪保護者 535 名≫

Ⅵ　提案授業　早見表

美術文化についての理解を深めるための授業を行うに当たって、様々なアプローチを考えた。ここでは、取扱い時間とテーマを軸とし、取組の切り口に合わせて実施案を見付けられるよう表にまとめた。各指導案の「解説」の中に展開例が記述されており、生徒・学校の実態や指導者の意図・計画に合わせて活用しやすいように提案してある。

内容／時数	文化的な側面	実生活に関わる側面
10分～15分	**①「美術史」**（鑑賞・制作）P8 毎授業1テーマを扱い、美術的な知識や考え方に関心をもたせ、3年間で「美術史ノート」を完成させる（歴史の流れを知り、つながりを知る）。	
1時間	**②「身近に美術を探そう」**（鑑賞・レポート・言語活動）P10 二つの面からを意識したテーマから生活の中に美術文化を発見させ、生活における美術の役割に気付く（「着物」と「交通標識」を通して）。 **③「美術を大きく捉えることができるか」**（鑑賞・言語活動）P12・18 様々な角度から美術的要素について考え、話し合うことで自らの美術の判断基準を広げ、美術的要素について知る（班活動による「気付き」探し）。	
2～3時間		**④「広げる！深める！美術の視点!!」**（鑑賞・言語活動）P14 関連のなさそうなものの中に美術的要素を探り、機能美や心情に働きかける美しさに気付き、美術文化への理解を深める（「ペットボトル」と「一流スポーツ選手の動き」を通して）。
4～5時間	**⑤「用の美と伝統工芸　堆朱（ついしゅ）のはし」**（制作・共通事項）P16 日用品としての「はし」は、人間工学で長さを求められることなどを知り、形状も機能に大きく関わっていることを知る。伝統工芸の「堆朱（ついしゅ）」の伝統美を踏まえて自分の「はし」の制作をする（「はし」の機能性と「漆」の伝統美）。	

提案① ◆対象学年：全学年　◆授業形態：鑑賞，制作　◆側面：文化的な側面　◆時数：10～15分程度

【学習活動の概要】

1　題材名　鑑賞「美術史」　（第１学年「Ｂ鑑賞」）

2　題材の目標

１年間継続し、世界の美術史を学ぶことを通して、自国の美術文化への理解を深める。

3　評価規準

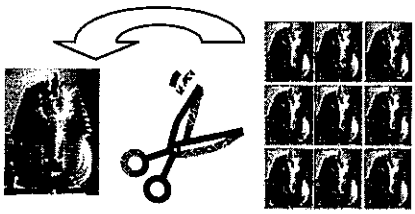
【美術への関心・意欲・態度】美術的な知識に関心をもち、ノートに書くなど意欲的に身に付けようとしている。

【鑑賞の能力】美術史の学習を通し作品の意味や美しさを知ろうとしている。

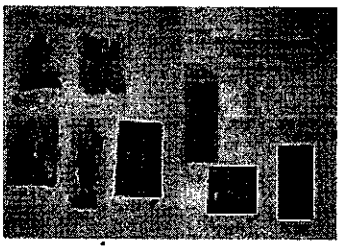
4　題材について

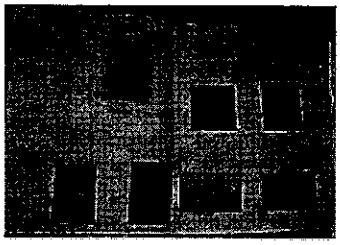
各国各時代の美術史の流れを学習する。視覚的にも美しくなるように、作品をカラーコピーしたものを指導者が準備し、ノートに貼らせる。美術文化を理解しながらデザイン的なレイアウトも考え、オリジナルの美術史ノートを作っていく。

5　主な学習活動（毎時間１０分～１５分）

	学習活動（例：エジプト美術史）	美術文化についての理解を深めるための指導上の留意点
導入	○黒板の美術史をノートに写し理解を深める。 例：なぜピラミッドやミイラを造ったのか？ピラミッドの謎など	・年号を覚えるのが目的ではないので、時代背景を踏まえた大きな流れを板書する。 ・写真を配布した後に、見やすいレイアウトの仕方を参考例を挙げながら説明する。
展開	○各美術史ノートに写真（絵画や彫刻の図版を小さくコピーしたもの）をレイアウトしながら貼る。	例：ツタンカーメンなどのカラーコピーの写真を生徒数分切り取って渡し、自分のノートに貼らせる。 
まとめ	○貼った写真を見ながら、美術史の流れの説明を聞くことで、美術史を理解する。	・自国や諸外国、時代ごとの特徴的な美術文化を分かりやすく説明する。

・ノート例





【解説】美術史

【授業展開例と学習指導要領との関連】

中学校学習指導要領　第１学年　Ｂ鑑賞（１）イにおいて、「身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。」と示している。

本授業は、美術史を継続的に学習することで、自国と諸外国の違いや共通点を具体的な作品を通して比較、鑑賞することができる。さらに、自国の文化の技法を知ることで、自分の作品制作に生かすことができる。また、文化史をしっかりと学習することは本研究の「美術文化についての理解を深め」に大きく関わっており、自国文化への理解を促すことにもつながる。

【授業を行う上でのポイント】

・エジプト→ギリシャ→ルネサンス→印象派→インド→中国→日本というように美術史を単独で考えるのではなく、流れで捉えることで日本だけではなく他国の美術史とのつながりなどを把握できる。

・単に歴史として学習するのではなく、絵や彫刻をノート例のように資料として貼り、オリジナルの美術史資料を作ることができ、生徒の学習にも表現方法の工夫が入り集中して取り組める。

【応用例】

・ノート作りをデザインの題材として捉えることで、レイアウトや色彩の学習と関連付けることができ、生徒の構成力やデザイン力の向上につながる。

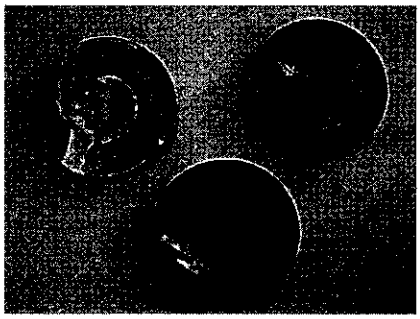
・美術史を 10 分程度から１時間の授業にすることで、より内容を発展させる授業にでき、作品制作で用いる技法などとも関連付けられ生徒の理解も深まる。

（例：エジプト美術で黄金比などを取り入れた授業を１時間にすることで生徒の理解が深まる。）

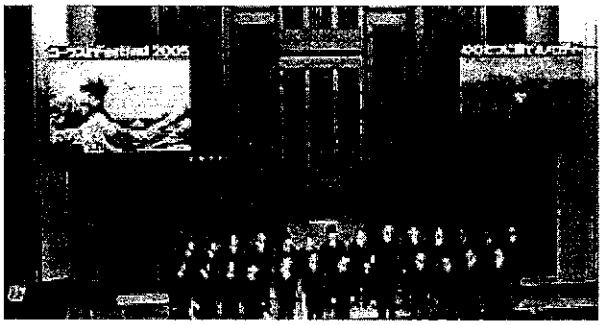
・具体例として、絵皿に空間を意識した絵を描く制作をする時に日本美術史を学習する。美術史で長谷川等伯や俵屋宗達（たわらやそうたつ）、本阿弥光悦（ほんあみこうえつ）などの作品の背景や空間を意識した絵を学習しているので自分の作品に学んだ技法などを生かすことができる。

・修学旅行前に、日本美術史（仏教美術）を行うことで、より明確に仏像の時代背景や意味などを理解でき、旅先で主体的に見学することができる。

・生徒が学習した絵画を共同制作（例：貼り絵）にすることで、全校生徒の一体感と校内の文化的気風を高める。



例：絵皿



例：全校生徒による貼り絵

提案② ◆対象学年：全学年 ◆授業形態：鑑賞，レポート，言語活動 ◆側面：文化的な側面
◆時数：1～2 時間

【学習活動の概要】

1 題材名 鑑賞「身近な美術を探そう」 （第２学年「Ｂ鑑賞」）

2 題材の目標

身近な生活の中に「美術文化」を探し出し、それが「美術の役割」として生活を豊かにしていることを感じ取る。

3 評価規準

【美術への関心・意欲・態度】造形的なよさや美しさを主体的に感じ取ろうと物をよく観察している。

【鑑賞の能力】伝統美や機能美について造形的なよさや美しさを感じ取り、自分の考えをもつことができる。

4 題材について

自分たちの身近な生活の中の「美術の役割」に気付き、それによって、身近な生活が美しく心豊かになることに気付かせる。よさや美しさを知り身近な環境の中に見られる造形的な美しさを感じ、「美術」や「文化」に対する意識を目覚めさせる。

5 主な学習活動（２時間完了）

	学習活動	美術文化についての理解を深めるための指導上の留意点
導入	○事前準備 ・家の中、生活の中に「美術」を感じるものを探してくることが宿題 ○ほかの人の意見を聞き、自分の身の回りにある「美術」を再認識する。	・準備は、和柄の風呂敷数枚、切り子のグラス、交通標識の印刷物、ワインオープナー等の実物
展開	○それぞれに気付きのポイントを確認する。 ○事前 30 項目アンケートの中から、気付きのポイントを聞き理解する。 ○伝統・デザイン（色彩）・機能などの観点に気付く。	・「文化的な側面」「実生活に関わる側面」の二つの側面から例を挙げて気付きのポイントを示す。 例１ 伝統美として「着物」「和柄」 例２ 色彩・デザインとして「交通標識」
まとめ	○身近な生活の中に「美術」を探し、見付けレポートのテーマを考え、設定する。	・伝統と色彩（デザイン）・機能などのポイントを絞ってテーマ設定できるようにする。 ・レポートの構成・レイアウトなどを提示し、作成の手順を説明する。

【解説】身近な美術を探そう

【授業展開例と学習指導要領との関連】

中学校学指導要領　美術　第２学年及び第３学年「Ｂ鑑賞」(1)ア・イに、「(略) 目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め（略)」、「(略) 自然や身近な環境の中に見られる造形的な美しさを感じ取り、(略) 生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解すること。」と示している。

本授業は、生徒自身が身近な生活の中に多くの伝統美が存在していることを知り、日常で利用・使用している多くのものが機能を追求したデザインの下に存在していることや、それらの「美術の働き」が生活を美しく豊かにしていることに気付くことができる。

【授業を行う上でのポイント】

・授業の前に、宿題として自分の生活を「美術」を意識した目で観察させ、意識をもたせる。
・導入時、「日本らしい」「昔からある」「きれいな」「大切な」など骨董（こっとう）や、美術品を連想できる言葉を使い視点を広げさせる。
・副教材などにある「漆器(Japan)」や「織物（藍・草木)」「鉄器」などの予備知識も準備し、伝統工芸の説明を入れ、興味を広げられるようにする。
・実際に見せられる実物（和柄の風呂敷・江戸切子のグラスなど）を準備し、手に取らせて関心をもたせる。
・交通標識の色彩と、１年の色彩の学習のつながりに気付かせ、生活の中に色彩の感情効果が生かされていることを確認させる。
・ワークシートを使い、例を挙げるときには、「気付き」の助けとなるよう「伝統美」「機能美」「色彩（心情)」などの項目に沿って例を挙げて身近にあるものに興味をもたせる。

【応用例】

１〈例に挙げる物を伝統文化に絞る。〉

時代を絞り、類似したもの・種類の違うものなどテーマを絞り、関心を集中させる。

例１：「漆」…「蒔絵（まきえ）」「螺鈿（らでん）」「沈金」「堆朱（ついしゅ）」「彫漆」「拭き漆」など

例２：「焼き物」…「種類」「特徴（産地)」「用途（歴史)」「作り方」など

２〈例に挙げる物を実生活に関わる側面をもつものに絞り生活の中に関心を集めさせる。〉

機能重視の製品のデザインや、デザイン重視の製品などに絞る。また、色彩（心情）や空間を意識した、生活の中での自分との関わりの深いものに絞り、深める。

例：手で握るもの…「水道の蛇口」「ドアノブ」「ナイフ」「テレビリモコン」「シャープペンシル」「ハンドル」「電話の受話器」など

３〈レポートの発表をする。〉(2 時間目)

Ａ．電子黒板や書画カメラ等を活用し、一人２～３分程度で自分の言葉で発表する。言語活動による意見交換や発表を聞いて、ワークシートに自分の「気付き」をまとめる。

Ｂ．レポートを掲示し見学する。ワークシートに２～３点のレポートについて自分の考えや感想を書く、又は興味をもったレポートに対し、カードに意見や感想を書き、本人にカードを返却することにより、一人では気付かなかった視点や価値に気付くことができる。

提案③　◆対象学年:全学年　◆授業形態:鑑賞, 言語活動　◆側面:実生活に関わる側面　◆時数:１時間

【学習活動の概要】

１　題材名　　鑑賞「美術を大きく捉えることができるか」　（第１学年「Ｂ鑑賞」）

２　題材の目標

身の回りから美術的要素のある物を見付け、機能性や美しさを感じ取り、グループ内で意見を交換しながら、美術に対する見方や意識を広げる。

３　評価規準

【美術への関心・意欲・態度】生活に密着している身の回りの物に対して、自分の考えや感じ方を意欲的に見付けることができる。

【鑑賞の能力】話合いや指導者の提示物を見ることを通して、鑑賞のルールを学び、美術に対しての新しい見方や価値を感じ取ることができる。

４　題材について

本題材は身近にあるものの中に美術的要素（色彩、形、機能、感性など）がどのくらい含まれていると感じるかを、「すごく感じる」「ちょっと感じる」「あまり感じない」の３段階に分け、一人一人が判断した後、グループ活動を通して意見の交換をする中で、自分の判断基準の幅を広げることを目標にしている。授業後半では、指導者が持ち寄った品物を生徒に見せ、どのような美術的要素があるのかを解説し、理解を深めさせる。

５．主な学習活動（全１時間）

	学　習　活　動	美術文化についての理解を深めるための指導上の留意点
導入	○配られた付箋に、「すごく美術を感じる」はピンク、「ちょっと美術を感じる」は黄色、「あまり感じない」は青になるよう、判断したものを一枚に一つ書き出すことで、漠然としていた美術的要素への感じ方を整理できる。	○事前準備 ・各自に三色三枚の付箋を用意する。 ・各班１枚、付箋が貼れる大きめの画用紙を用意する。 ・直観を大切にして周りに惑わされないようにする。
展開	○個々で書いたものを、班になってまとめる。 ○色ごとに全ての付箋を貼る。重複しているものなどを整理する。他の意見から、自分の考えを深めることができる。班で意見を述べ合い、考えをまとめてみる。一番悩んだ理由を発表する。 ○指導者が用意した品物を見て、解説を聞く。	・一人一人の判断に正解、不正解があるわけではことを強調する。 ・個々の判断基準や思いが、積極的に話し合われているか、机間指導、声掛けをしていく。 ・他の班の意見をよく聞き、考え方の広がりを促す。 ・なぜ美術なのか、理解の幅を広げられるようにする。
まとめ	○美術の見方や美術的要素の捉え方が広がったことに気付く。	・自由な雰囲気を保てるよう配慮する。

【解説】　美術を大きく捉えることができるか

【授業展開例と学習指導要領との関連】

中学校学習指導要領　第１学年　Ｂ鑑賞（１）イにおいて、「身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。」と示している。

本授業は、自国や自分たちの身の周りにある身近なものに、興味、関心のもてる題材になるよう設定した。

一日の生活の中で、美術品にどれくらい触れるのか。自分の周りには、自分で選び買いそろえたものがどれくらいあるのか。普段何気なく使われているものは、どんな基準でそろえているのか。など、普段見落としがちな身近な物に視点を当て、自分の生活を見直すきっかけになるよう考えた。

さらに、「言語活動の充実」を図るため、個人で考えた意見をグループでの話合いを通して、相違点などを探っていく活動を取り入れた。活発な意見交換を通して、今まで考えなかった新しい発見や、他者の意見を取り入れ自分の発想の幅が広がるような活動につなげていく。

【授業を行う上でのポイント】

・最初は自分の考えを大事にするように、気を付けさせる。
・各自の意見には間違えがないことを確認する。
・他者を受容できるようにする。
・よい意見は自分にも当てはめて考える柔軟性をもたせる。
・理由がはっきり説明できれば、考えを押し付けない。
・作品紹介は興味、関心を高めるためのものなので、普段使っているものから知識を要するものまでを入れると生徒たちの反応は大きくなる。
・批評することの大切さや、ほかの人の意見の新鮮さに気付かせる。

【応用例】

〔１時間扱いでの内容の工夫例〕

・登校中、教室内、学校内など物を見付ける範囲を変えれば、探し出せる対象が変わって考えやすい。
・自分の中の嗜好（しこう）の変化を考えさせると、自分を見つめる機会となる。
・家の中を対象に考えると、それぞれの家庭のこだわりなどが見える（人権上の配慮が必要）。

〔２時間扱いでの内容の工夫例〕

・全体を２時間扱いにして、２時間目に全員に自分の美術文化を深められた品物をもち寄らせる（場合によっては絵、写真でも可）。１分程度のスピーチで発表させる。
クラスや、学校全校で結果を集計し美術の枠の広がりや美術文化の深まりを数値化することで、実施前後の変容を見ることもできる。

提案④　◆対象学年：２学年　◆授業形態：鑑賞，言語活動　◆側面：実生活に関わる側面　◆時数：１～２時間

【学習活動の概要】

1　題材名　　鑑賞「広げる！深める！美術の視点!!」　（第２学年「Ｂ鑑賞」）

2　題材の目標

身近な生活用品や環境の中の事物から造形のよさや美しさなどを感じ取ることで、美術的な視点（造形美、機能美、心情的な美などを捉える見方）に気付き、その視野を広げることで美術文化についての理解を深める。

3　評価規準

【美術への関心・意欲・態度】　指導者の発問を通して授業内容に関心をもち、言語活動に意欲的に取り組むことで、身近なものや美術と関連がなさそうな事柄の中にも美術的要素（造形美、機能美、心情的な美など）を見出すことできる。

【鑑賞の能力】　教材を美術的な視点で捉え、考えながら見ることで、自分なりに深めて美術的要素を見出せる。

4　題材について

本題材は、身近なもの（ペットボトル）や、美術と関連がなさそうなもの（一流スポーツ選手の動き）の中に、美術的要素がないかを探る学習である。造形的な美しさだけでなく、機能美や心情に働きかける美しさなどにも気付き、美術の捉え方や視野を広げることで美術文化に対する理解を深める。

5　主な学習活動（全１～２時間）

	学習活動	美術文化についての理解を深めるための指導上の留意点
導入	○ペットボトルについて、印象や気付きをキーワードで書くことで美術的な見方のきっかけをつかむ。	・用意したペットボトルを見せ連想させる。
展開	○キーワードを発表し合うことで、身近な物の中にも美術的な側面があることに気付く。 ○周りの意見を聞き、美術的視点を増やす。 ○キーワードの中に「造形美」「機能美」、また「心情に働きかける美しさ」を意味する言葉があることを知り、美術を捉える視野を広げる。 ○これまでの学習で気付いた美術的な視点で、美術と関係がなさそうな「一流スポーツ選手の動き」中にも美術的要素がないか探ってみる。 ほかの教材・事柄を加えることで２時間扱いにできる。	・キーワードを発表させる。 ・自由に発表できるような雰囲気をつくり、内容を板書する。 ・「色」「形」「機能」「心情」といった核になる言葉を板書で整理して示す。
まとめ	○身近な生活環境の中にも美術的な要素があるという新しい価値に気付き、美術的視野や発想の広がりにつなげていこうとする。	・美術を狭く考えるのではなく、視野を広げ理解を深めて美術的要素を捉えていくことで、これからの授業や生活がより豊かになることを示唆する。

【解説】　広げる！深める！美術の視点!!

【授業展開例と学習指導要領との関連】

中学校学習指導要領　美術　第２学年及び第３学年「B　鑑賞」（１）アにおいて、「造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批判し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。」と示している。

本授業は、特に「目的や機能との調和」や「自分の価値意識」について学習を深めるものである。この授業を通して学習指導要領の目標に加わった「美術文化についての理解を深め」を実践することにつながり、生涯にわたり心豊かな生活を営む感覚・能力や態度を身に付けさせることができる。

【授業を行う上でのポイント】

・「造形美」「機能美」「心情的な美」といった核となるキーワードを基に授業の目標に近付くような授業展開にする。この視点を得ることで、様々な物に美術的な要素があることに気付くことができる。
・扱う教材はペットボトルや一流スポーツ選手の動きに限定するものではなく、授業者が扱いやすいものや時事的な事柄や学校の実態等に応じたものに設定できる。また、美術的な要素（造形的な美しさ、機能美など）を見付けにくい教材を用いると生徒の思考や理解がより深まる。
・ワークシートへの記入や発表、意見交換など言語活動を取り入れ、生徒全員が核となるキーワードを共有し目標に近づいていけるとよい。
・順序として、まず一つ目の教材から核となるキーワードを探った上で、次に美術と関係がなさそうなものに視点を当てて考えさせると理解がより深まる。
・教材については、実物や写真などの具体物を提示できると生徒は考えやすい。

【応用例】

１　［授業開始時の導入の例］

５～１０分を目安に、「私が見付けた美術の視点」といった設定で一人～二人の発表の形をとる。レポート形式にして展示発表することもできる。

２　［２～３時間の例］

生徒に考えさせる事柄を増やす。例えば、授業者が１０～２０の様々な項目を用意し、美術との関わりが深いと思うものをアンケート調査しておく。その集計結果から上位、中位、下位別にいくつかピックアップして考えさせてみる。最後にもう一度アンケートを行って結果を比較することもできる。

３　［４～５時間の例］

この授業を導入として、表現活動につなげていく。ここで身に付けた鑑賞の能力を、発想や構想の能力に発展させ作品制作をしてみる。具体的には、パッケージデザインや身近な日用品などのプロダクトデザインがふさわしい。作品は実物を作る形でも、紙上で表現する形でもできる。また、その取組をプレゼンテーション形式で発表する学習に発展させることもできる。

提案⑤◆対象学年：１学年 ◆授業形態：制作，共通事項 ◆側面：実生活関する側面，文化的な側面 ◆時数：５時間

1　題材名　「用の美と伝統工芸　堆朱（ついしゅ）のはし」　〔５時間（本時１時間目・導入部分）〕

2　題材の目標

目的や機能との調和のとれた美しさを味わうことを通して、美術文化の継承と創造への関心を高め、素材の特性を生かして、漆の積層の美しさを創造的に表現する。

3　評価規準

【美術への関心・意欲・態度】用の美や堆朱（ついしゅ）の美しさについて意欲的に考え、はしがもつ美に気付こうとしている。
【発想や構想の能力】積層をどのように削り出すか工夫し、漆工芸の美しさを表現しようとしている。
【創造的な技能】やすりやコンパウンドを正しく用い、美しく仕上げをしようとしている。
【鑑賞の能力】機能美や伝統美に触れることを通して、美に対する見方を広げようとしている。

4　題材について

本題材は、１学年を対象として、堆朱（ついしゅ）のはし作りを通して、はしのもつ「用の美」と日本の伝統工芸「漆」について学習するものである。５時間授業の導入の１時間目である。

5　主な学習内容（５時間中、導入の１時間目）

	学習活動	美術文化についての理解を深めるための指導上の留意点
導入	○自分の生活、経験を思い起こす。 なぜそのはしを使っているのかを思い起こすことで、はしの機能について考える。	・自分が家庭で使用しているはしを持参させる。そのはしは「自分で選んだものか？」「家の人が買ってきたものを使っているのか？」などの質問を通して、実体験からはしについて考えさせる。
展開①	○はしの使いやすさは手の大きさに関わっていることを知る。また、実際に自分の手を測ってみて、自分にちょうど良いはしの長さを知る。 ○持ち手の形は「持ちやすさ」先端の形は「つまみやすさ」素材は「丈夫で長もち」に関係することを知る。使いやすい＝「用の美」という考え方を知る。	・生徒の持ってきたはしから、例として複数本提示し、「なぜ人によって長さが違うのか」「なぜ丸みや角があるのか」「なぜプラスチック製なのか」など、形状や素材から機能について考えさせる。 ・よいはしの条件を考えさせ、日用品のデザインは機能性が配慮されていることを感じさせる。
展開②	○漆は日本を代表する工芸品であることを学ぶ。硬く丈夫で食器の素材として適していることを知る。また、手入れの大切さも知る。 ○指導者の堆朱（ついしゅ）制作の実演を見て、次時からの制作をイメージする。	・漆は木の樹液から採取されていることや、その性質、制作工程、また、明治時期には主要産業として海外に輸出されていたことなどを、資料集などの図版資料を用いて理解させる。 ・制作のイメージをもつことで、次回へのイメージを高めさせる。積層の美しさや模様の意外性を感じさせる。
まとめ	○いつも使っているはしについて、何か発見があったか学んだことを整理する。	・授業の前後で、はしに対する認識がどのように変化をしたか確認させる。

【解説】　用の美と伝統工芸　堆朱のはし

【授業展開例と学習指導要領との関連】

中学校学習指導要領第１学年Ａ表現（２）ウにおいて「用途や機能、使用するものの気持ち、材料などから美しさを考え、表現の構想を練ること。」とある。

本授業は「はし」という日々の食生活において欠かせない道具がもつ、美しさや伝統に触れることをねらいとしている。食文化の多様化とともに、フォークやスプーンといったカトラリーを用いる機会も多くなったが、「はし」について考え制作することを通して、「はし」に元来備わっている価値に気付くこと目指した。

【授業を行う上でのポイント】

・生徒が持ってきたはしを例として提示すると、「機能美」について理解させやすい。複数のはしを並べて、長さや形、色の違いを視覚的に実感させる場を設定すると効果的である。生徒分だけではバリエーションが少ないことを想定して、指導者がある程度、異なる長さ、形、色、素材のはしを用意してもよい。比較検討によって、「長さが違うのはなぜだろう」「様々な色や模様があってきれいだな」「一見、二本の棒だけど、よく見ると形が微妙に違うな」など、造形上の特徴に気付くことができる。その気付きを「機能美」についての理解につなげていく。

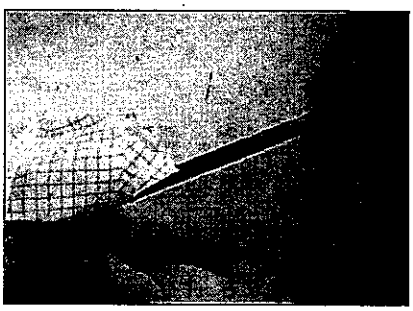
例えば、長さは個人の指の長さを規準に考えられていること、持ち手部分は円、四角形、六角形と多様であり、「持ちやすさ」に大きく関わっていること。ぬめりがあるものも挟みやすいように先端にさめ肌状の加工が施されていたり、渦状の溝が彫られていたりすることを学ばせる。

このような理解を土台に、「用途に応じた形＝機能美、用の美」というものの見方があるということを伝えていくと、はしのみならず、身の回りの美術的な要素に気付く契機になると考える。

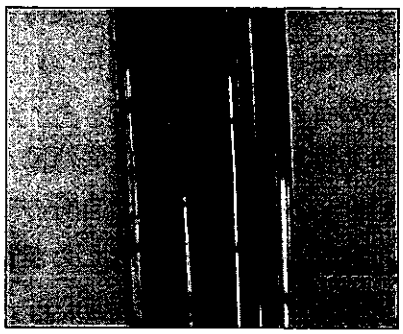
・歴史的背景を伝えることでより関心を高めることができる。

漆は英語では Japan(ジャパン)と呼ばれ、硬く美しいつやをもつ日本工芸の代名詞的存在であった。この硬質性が「丈夫で長もち」という機能を果たし、つやは料理をより美しくおいしそうに見せた。食器の材料として、日本では古くから用いられてきた。歴史や素材への理解を深めることで、自分の制作においても発想や構想の質を高めていくことができる。

・堆朱(ついしゅ)は色の異なる漆が何層も重ねられており、やすりで削ることで積層の断面が出てくる。削る場所や角度によって様々な模様が表現できる。削る「角度」「場所」「面積」などで変化をつけた複数のサンプルを用意すると、生徒は制作へのイメージがわきやすい。



・布にコンパウンドを付けて磨いている様子



・左がやすりで模様を削り出したもの
右が削り出す前の状態

提案③の指導案・具体的な実践例

美術科　学習指導案

日　時　平成○○年○月○○日（○）○校時
対　象　○○○○○○中学校　○年○組（○○名）
場　所　美術室
授業者　○○○○

1　題材名　　鑑賞「美術のワクを広げよう」　（学習指導要領　第１学年　Ｂ鑑賞）

2　題材の目標

身の回りから美術的要素のあるものを見付け、機能性や美しさを感じ取り、グループ内で意見を交換しながら、美術に対する見方や意識を広げる

3　題材について

（1）研究テーマとの関連について

本研究テーマは「美術文化についての理解を深める授業」である。

一般的な中学校の授業では、表現活動を重視する傾向があり、鑑賞や知識面の学習を行う時間の確保が難しい現状がある。

本授業では個々の鑑賞活動を通して、作品や身の回りのものに対する思いや考えを説明し合い、美術文化に対する関心を高めることを目標にした。他者との意見の相違、自分の考え方の変化や広がりを感じ取り、美術の枠を広げ、自らの固定概念を柔軟にすることで、今まで感じ取れなかった美術文化についての理解を深める。

（2）言語活動との関連について

従来の美術科の授業では言語活動を取り入れた活動が少なかった。鑑賞活動の中でも意見交換や話合いの場面は少なく自分の考えを広げる、また変化させる機会があまりなかったと言える。今回の活動で、生徒たちが育ってきた環境や地域性などによる考え方を、班活動での話合いを通して、意見の相違点や、互いの思考を知ること、更に話合いを続けることで、自分の考えが広まり、また変化することに気付かせる。

4　題材の評価規準

観　　点	ア　美術への関心・意欲・態度	イ　鑑賞の能力
題材の評価規準	・身近にある物や作品、製品のよさや美しさなどに、関心を深くもっている。 ・意欲的に話合いに参加し、考え方を広げようとしている。	・文化や伝統として受け継がれてきたものや、機能的な製品の中にあるよさや美しさを感じ取ることができる。
学習活動における具体の評価規準	①題材に対し、自分の判断で意欲的・主体的に考えようとしている。 ②言語活動を通して、自己・他者の双方の考えを理解し、意欲的に話合い活動ができる。	①鑑賞したもののよさや楽しさを感じ取ることができる。 ②自分なりの意味や価値観を深めることができている。

5　本時の展開（全１時間）

	学習活動	教師の支援・ 美術文化について理解を深めるための指導上の留意点	評価方法【評価規準】
導入	○事前準備 付箋を受け取る。 ○本時の目標を確認する。	・準備物を板書で指示し、理解させる。 ・本時のねらいを明確に伝え目標を読み取らせる。	準備状況の確認
展開	○配られた付箋に美術を感じるものを一枚に一つずつ書き入れる。 「美術に関わりが深い」はピンク色 「少し関わりがある」は黄色 「あまり関わりがない」は青色の付箋に分けて記入させる。	●案の浮かばない生徒に、考え方を助言する。 ・周りと相談せずに直感で記入させる。	授業参加状況の観察 【ア】①

展 開	○班の形にして班長が分類する。色ごとに付箋を分け、重複している物などを整理する。 ○分類の結果を踏まえ、話合いをし、班の意見をまとめてみる。他者の意見から自分の考えを広げる。 ○話合いの経緯を発表する。意見の相違や班でまとまらなかった意見等も紹介する。 ○班の形を元に戻し、出た意見を踏まえて参考例を見ていく。身の回りの物の中にも美術的な要素があることに気付く。	・互いの意見や考え方を尊重し、納得できるように話し合わせる。 ●積極的に話合いに入るように助言する。 ・一人一人の判断に正解・不正解があるわけではないことを強調する。 ・参考になる物や写真を用意しておく。 ・身の回りにある物の中にも、造形美だけでなく、機能美や伝統的な美しさが備わっており、生活を豊かにしていることを気付かせる。	活動の様子【ア】② 発言・会話【イ】② 授業参加状況の観察【ア】①　【イ】② 授業参加状況の観察【イ】①
まとめ	○感想をまとめる。 ○自分の価値観に変化が出たことを確認し、美術文化への理解が広がったことを確認する。	・新たに気付いたことや価値観を意識させる。 ・挙手で生徒の変容を確認する。	提出物【イ】②

≪●生徒への個別の支援≫

【授業を行う上でのポイント】

・視聴覚教材（教材提示装置等）の活用により、参考作品の詳細な映像が映し出せる。（カラーコピーを拡大するなど、工夫もできる。）

・班での話合い（言語活動）を取り入れることで、意見を深めたり、考え方を広げたりでき、生徒全体の学習効果が高まる。

【応用例】

・全体を２時間扱いにして、２時間目に全員に自分の美術文化を深められた品物を持ち寄らせる（実物でなくても絵や写真でも可能）。１分程度のスピーチで自分の考えを発表させる。

・クラスや、全校で結果を集計し美術の枠の広がりや美術文化の深まりを数値化することで、実施前後の変容を見ることもできる。

Ⅶ　研究の成果

1　生徒の変容

提案①　「美術史」について

事前に行ったアンケートでは、「葛飾北斎」や「金閣寺」などといった自国の美術作品を「美術に関係する」と思う生徒が40%前後と低く、日本美術の認知度が低いという実態が明らかになった。また「葛飾北斎」の認知度は、学年を経るにしたがい上がっている。これはひとえに授業で取り上げているかどうかの差が大きいと考えられる。これらの結果は美術史の学習を行っていなければ、自国の文化をあまり知らないまま中学校を卒業することにつながる、と読み取れる。

この授業案では、美術史を授業の最初の10分程度で行うことで、生徒は3年間で1冊の美術史ノートを作り上げることができる。生徒は、自分のオリジナルの美術史ノートを作ることで愛着をもって美術史の授業を受けることができている。そして、風神雷神が遠くギリシャの神から来ていることを知り、日本の仏像が遠くインドから来ていることなど、日本と西洋文化のつながりを理解することができる。

このように、美術史の学習を視覚的に行うことで自国の美術文化を分かりやすく理解し、さらに、諸外国との違いやつながりを知ることで国際理解にもなっていく。また、言語活動や社会科の学習と関連させることもでき、生徒の学ぶ意識を高めることができる。

提案②　「身近な美術を探そう」について

今まで意識することなく生活していた日常の中に「美術」を見付け出すことができ、それが生活を豊かにしていることを理解することができた。

「気付き」のポイントを知ることで、毎日生活している中で、自分が使っている文房具や、身の回りにある日用品などに「美術」を「意識をする」ことができるようになり、今まで気付かなかったものに「美術」を見付け出すことができた。無意識のうちに形、色、素材、優れたデザインを選び、生活に取り入れることで、心豊かな生活を知らず知らずのうちに営んでいることに気付くことができた。また、今まで身近に存在していたが、知識・意識のないまま見過ごしていた「伝統工芸品」などに目を向けることができるようになり、歴史やその制作工程、作品に込められた思いを知ることができた。それは、日本の伝統と文化に理解と愛情を深めることとなり、自国の文化に理解と愛情を深めることは、諸外国の美術や文化との相違や共通性に気付くことにもなる。また、環境を美しく心地よいものとして整えていくことは、居心地のよい場を作ることになるということを理解することとなる。つまり、「意識をもって」生活をすることは、美しいものやよりよいものを自分の基準で選ぶことのできる価値意識を育て心豊かな生活を送ることになる。

提案③　「美術を大きく捉えることができるか」について

自分の生活をじっくり見つめる機会が少なかった生徒達が、改めて身の回りには美術的な物があふれていることが感じ取れたようだった。また、「自分の意見に間違いはなく、自分

の思ったことでいい。」この言葉掛けにより、安心して自分の意見を考えることができた。ただ、自分の考えに自信はないが、人の意見を聞いて考えを変えることには、まだ抵抗があるようだった。

さらに、継続的に深めていくためには、意見が言いやすい話合いの決まりを作り、言語活動を身近に取り入れた授業展開を発展させていくと、効果が得られると考える。

美術文化に愛着をもち、ほんの少しの気付きから生活が豊かになることで、よりよく生きる意識が育ち、生きる力につながると考える。

提案④　「広げる！深める！美術の視点!!」について

生徒の学習（気付き、思考、鑑賞など）を、指導者の設問を通してワークシートにまとめていく形で深めていった。次は、その設問と生徒の記述（抜粋）である。

◎設問１…「ペットボトル」を見て感じたこと、考えたことをキーワードで書いてみよう（実物を複数提示）。
○生徒→・便利　・軽い　・きれい　・飲み物　・形が豊富　・つぶせる　・リサイクル　・好き
◎設問２…キーワードの中で美術と関係がありそうなものを書き出してみよう。
○生徒→・美しい（きれい、かわいい）　・形、機能（持ちやすい、飲みやすい）　・好き嫌い（形の個性）
◎設問３…なぜ関係があると考えたのか、理由や意見を書いてみよう。
○生徒→・色や形はデザインに関係する　・使いやすさや機能は美術につながる　・好みと美術は関係ある
◎設問４…では、「一流スポーツ選手の動き」の中に美術の視点や要素がないか、自分なりに探って考えたことを書いてみよう（多種目のスポーツ選手の写真を資料として配布）。
○生徒→・フォームの美しさ　・無駄のない動き、機能美　・筋肉美　・精神的な美しさ　・一瞬の美
◎設問５…この授業で学んだこと、気付いたこと、感想などを書いてみよう。
○生徒→・じっくり考えてみると、多くのものに美術の要素があることに気付いた。
・美術は芸術の一つとしか捉えていなかったけど、生活の中にも美術があることを知った。
・美術の視点が広がった。これからも様々なものに美術を見付け求めていきたい。

この展開の中で、設問１から３では生徒の意見を発表させ、板書で整理をすることで、生徒たちは「造形美」「機能美」「心情的な美」といった核になるキーワードに気付くことができた。その上で、設問４に取り組み、これまでは意識しなかった美術の視点をもって対象を鑑賞することができた。その結果、設問５では、９割以上の生徒が美術の視点が広がった、深まったと書いている。また、７割の生徒がこれからの生活や授業で美術の要素を意識していきたい、と述べている。これらから読み取れる生徒の変容は、美術文化を捉える見識が広がったものであり、理解の深まりを示す成果であると言える。

提案⑤　「用の美と伝統工芸　堆朱のはし」について

この主題は、生徒アンケートの結果「はし」が30項目中25位であった結果を受けて取り組むことに決めた。「文化的な側面」と「実生活に関わる側面」から「はし」に触れながら考えることを通して、『「はし」って実は美術だな』と生徒が実感できるような展開を考えた。結果、事前のアンケートでは31名中６名のみが「はしを美術だと思う」と答えていたが、授業後のアンケートでは全員が「美術だと思う」と回答し、意識の変容が見られた。

さらに、生徒の変容については、感想の考察から四つの傾向が見えた。

①形や色に関心をもった・・・「はしにも色や模様があるから美術だと思いました。」「色も形も様々で、好みが分かれている。」

②機能美に関心をもった・・・「今までは家の人が選んだものを使っていて、そんなに気にしてなかったけど、今度は自分でも選んでみて『つかみやすい』ことを感じてみたいと思いました。」

③伝統に関心をもった・・・「はしをもっと知れば、日本の伝統が分かるかもしれないと思った。」「はしは日本の大切な伝統工芸だと思う。」「はしは日本の美の一つだと思いました。」

④実用品として改めて関心をもった・・・「毎日何気なく使っているものだけど、よく見たり考えたりするといろんな発見があった。」「次に新しいはしに変えるときに参考にします。」

「文化的な側面」と「実生活に関わる側面」という視点を与えたことによって、日常の実体験を土台に新しく知った事柄が積み重なり、「はし」という道具がもつ色、形、素材といった価値が生徒の中でより高まったのではないかと感じる。

2　研究のまとめ

本研究では、この１年間を通して、「美術文化についての理解を深める授業」を研究してきた。この主題は、生徒の実態と指導者の状況から見える課題を踏まえ、「美術文化についての理解を深め」という新学習指導要領の美術科の目標に付け加えられた文言を、どう授業実践につなげていけるかを考察し、さらに、実践することによって生徒がどのように変容するかを最大の焦点として設定したものである。そのために、様々な調査結果や独自のアンケート調査などから、生徒や生徒を取り巻く環境について実態を捉えた。そして、そこから見えてくる課題を改善できる授業の提案という形で研究を進めてきた。

この提案授業の授業実践による検証の結果、仮説を基に期待した生徒の姿に近付いたことが、生徒の変容から実証され、本研究が一定の成果を得たと言える。また、美術文化についての理解を深める授業を具体的に提案していく、という目標もおおむね達成することができた。具体的には次に示したとおりである。

○「文化的な側面」からの授業による生徒の変容

江戸切子のグラスや和柄の風呂敷、はしなどを教材に取り上げ、伝統文化と身近に接することで、生徒に日本文化の美術的な要素を再認識させることができた。そして、これまで気が付かなかった歴史やその制作工程、作品に込められた思いを知ることで日本文化への理解や継承と創造の重要性を学ぶことができた。また、美術史を学習することにより、自国の文化の理解や諸外国とのつながりを知り、国際理解にもつなげることができた。

○「実生活に関わる側面」からの授業による生徒の変容

ペットボトルや交通標識、また本研究で行ったアンケート項目などを教材として扱うことで、身の回りにある物に対しての美術の役割に気付くことができた。気付きにより美術への新たな視点ができ、授業後に多くの生徒が、「生活の中にも美術があることを知った」等の感

想をもった。身の回りにも美術的要素があふれていることを感じ、美術の役割に気付くことで、心豊かになり身近な生活環境をより美しくすることへの意識が高まった。

このように身近な生活環境に美術的関心を深めることで、生活や人生をより豊かにしていくことができ、今後の制作活動においても多様な表現につながると期待される。生徒たちが、生涯にわたって関わり続けていく「美術文化」についての理解をいろいろな角度から深め、自分の知識や技能、感性の育成につなげていくことができた。

以上のような学習を継続していくことが「美術を愛好する心情と感性を育て、豊かな情操を養う」ことになり、「生きる力」を育むことになると考える。

Ⅷ　今後の課題

1　新学習指導要領の継続的な研究と授業への応用

「美術文化についての理解を深める授業」を、本研究とは異なる角度からのアプローチで検討することで、更なる発展・深化があると考える。

2　指導者の創意工夫と授業内容の精選

来年度に新学習指導要領が全面実施となることを受け、年間指導計画を見直し、現在行っている題材と新しい内容との接点・関連を探り、言語活動やICTを活用するなど生徒の理解を早めるための授業の工夫をし、より効率よく効果的に授業を行うことが必要である。

また、刻々と変わる時代状況や生徒を取り巻く環境の変化に応じて、育てたい生徒の力を考え、指導者が柔軟に授業を計画立案していくことが求められる。

平成２３年度　教育研究員名簿

中学校・美術

地区	学　校　名	職名	氏名
杉並区	神明中学校	主幹教諭	○渋谷　里美
荒川区	第三中学校	主任教諭	梶田　久仁子
中野区	第二中学校	教諭	猪口　正和
清瀬市	清瀬第四中学校	主任教諭	川原　寛之
八王子市	加住中学校	主任教諭	小山内　繁

○　世話人

〔担当〕　東京都教職員研修センター研修部教育経営課
指導主事　　明石　典子

平成23年度
教育研究員研究報告書

中学校　美術

東京都教育委員会印刷物登録
平成２３年度第１８１号
平成２４年　３月

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８３６
印 刷 会 社　有限会社　シーダー企画